

たるをしる

～ 集落再生に動き出した志多留地区の挑戦～



8月末、全国各地から地域おこしに関心のある若者が上県町志多留地区に集結しました。なぜ、彼らは志多留に...？

今回の「next door」は、集落再生に取り組みはじめた志多留地区にスポットを当てます。

上県町志多留地区は、人口約70人。山と里と海の暮らしが一体となった農山漁村集落です。人口減少と高齢化によって限界集落化し、コミュニティや貴重な生態系の維持が困難になっています。

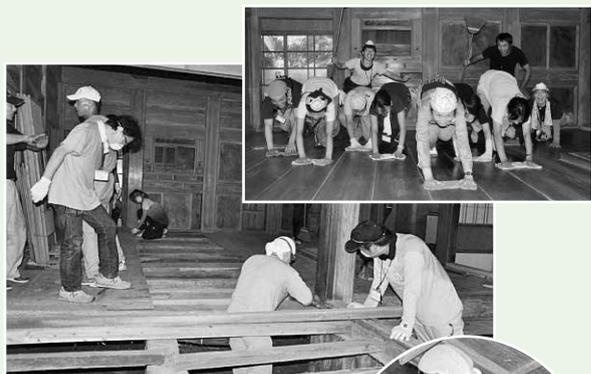
そんな志多留地区で行われたのが、「**島おこし実践塾**」。

「過疎化」「高齢化」「空き家」「耕作放棄地」...、これらは志多留地区だけではなく日本全体が抱える大きな課題のキーワード。

全国各地から集まった若者たちは様々なプログラムを通して、志多留の再生を、日本の集落再生を本気で考えました。



耕作放棄地を「田んぼ」に再生
一人の力ではどうにもならないような空き地が、
見る見る変わっていきました



「空き家」だって資源に
築100年以上の古民家を再生 壁も床もピッカピカ!



講師として参加していただいたのは、
情報誌「九州のムラへ行こう」編集長：養父信夫さん



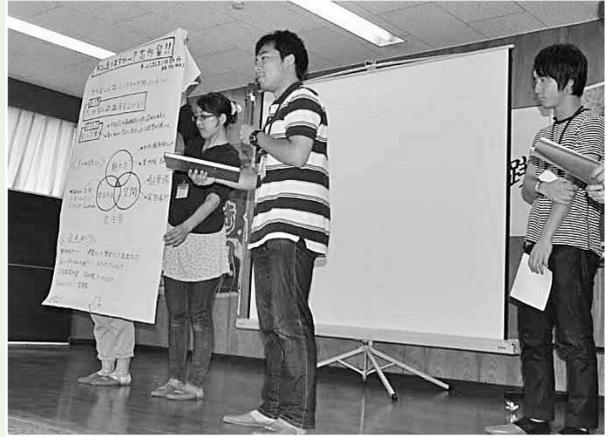
「志多留の再生」にみんなでアイデアを出し合います
途中、涙を流しながらの激論も!



食事は「志多留マダム」の指導のもと、
みんなで準備
対馬って美味しい!!!



各班が本気で志多留のことを考えた「志多留再生プロジェクト」を志多留の皆さんへ紹介



塾生たちが口をそろえたのは「志多留の皆さんの温かさに感動」したこと、そして「志多留の“宝”は“人”」であること

いだけなら」「泊めるだけならできますよ」など、みなさんの声を受け、今の志多留にできる形で受け入れました。

とんちゃん・いりやき・刺身など地区の女性たちと受講生が楽しみながら一緒にご飯作り。毎日が宴会みたいで、塾生との情報交換ができたのももちろん、集まることの少なくなっていた住民同士にとっても貴重な時間でした。塾生の限界集落を何とかしたいという思いは本当に真剣で驚きましたね。「海も山も里も自然の風景がこんなにも詰まったすばらしいところは他にありません」と言われたことが一番心に残っています。志多留が活性化するには、やはり外から若い人を受け入れないといけないと感じました。「受け入れる」のも地域おこしの一つの方法なんです。5日間ともに過ごした塾生はまるで自分の子どもや孫のよう。「3月にはしいたけの菌打ちの手伝いにきます」という青年がいたり、終わってからもフェイスブックで志多留の魅力を発信し続けてくれるグループもあります。本当にありがたいことです。



原田義則区長

30人を超える民泊なんて志多留始まって以来。高齢者ばかりの地区です。食事のお手伝

島おこし実践塾を終えて

志多留再生の 仕掛け人はこの人



木村さんにとっての志多留とは？

私が志多留に住み始めたのは昨年12月24日。以前住んでいた佐護も魅力的でしたが、私にとって志多留は飛びぬけて魅力的！

志多留は山・川・田・畑・集落・浜がすべてコンパクトに揃っていて、それらがすべてつながっています。さまざまな生態系が集まっている場所。

この集落は題材にできるものに溢れた「夢のフィールド」なんです。



木村幹子さん

対馬市島おこし協働隊 生物多様性保全担当
青森県青森市出身

北海道大学大学院環境科学院博士後期課程修了
日本学術振興会特別研究員
東北大学大学院生命科学研究科特別研究員

志多留に住んでまずはじめにやったことは、地区全世帯への聞き取り調査。一軒ずつ訪問して、何が志多留の誇りなのか、どんな特技があるのかなどをヒアリング。そこで感じたのは「米作りへの思い」が深いことでした。

稲作伝来の地と言われる志多留地区ですが、今では後継者がおらずほとんどの農地が耕作放棄地と化しています。「何とかしなくてはいけない」と誰もが思っている、高齢者が多く自分たちだけではどうにもできない現状。それならば「外から来る人たちの力を借りるしかない」「そして自らが動こう！」と決心し、耕作放棄地を開墾し米づくりを始めました。夢は、ここを黄金色に輝く稲穂でいっぱいにする事。

不安や悩みもありますが、区長さんを始め志多留の皆さんが「よそ者」の私に共感していただけることが何よりの支え。私が志多留のみなさんとやっている、やろうとしている資源循環型の取り組みを知ってもらい、農業・漁業をやりながら一緒に持続可能な集落づくりをやってくれる人たちに志多留に来てほしいですね。志多留を農村再生のモデル地区としてアピールしていきたいです。



木村さんの素敵なパートナー

自宅横で小さなカフェを営んでいる川口ミチホさん。木村さんにとって良き相談相手であり、おいしい手作りスイーツとコーヒーで心癒される場がここ川口家。



「木村さんが来て、何だか目が覚めた感じ。毎日おなじことの繰り返しだったけれど、新しい動きに気分が変わります。もし若い人がここに来て畑をしてくれたら荒地もなくなります。軌道にのればいいですね」

志多留の「山の達人」大平登志彦さん。「島暮らし体験メニュー」に山遊びを提案するなど木村さんをバックアップ。



【(大平) ここにはね
サンショウウオがおりるとよ！】
【(木村) エーっ！じゃあサンショウウオ探しを活動にいれましょう！】
「この先、人が増えたら、途絶えてしまった志多留伝統の祭りが復活できるかも知れないね」

「何もない」ってことは、決してありません。地域の魅力は、実はその足下に隠れているんです。

目を凝らせばきっと「自分たちの宝」を発見できるはず。

「**足るを知る**」という言葉を実感できる志多留は、ふるさとや地域の絆を知らない都市の若者たちにとって人間本来の生き方を実感できるフィールドであると同時に、「**対馬ならではの生き方**」を再発見できる場所なのではないでしょうか？



島おこし協働隊：松野デザイナーが塾生たちの「志多留再生プロジェクト」のプレゼンを集約して即席で作成した志多留地区のイメージロゴマーク